

## 向島学会第3回交流のサロン 都市計画キャラバン2004向島 スタートアップ公開シンポジウム】

### 「まちづくりとアートイベントの連携」

期日 2004年7月24日(土)午後1時半～4時  
会場 東武博物館ホール  
(墨田区東向島4-28-16 東武東向島駅)  
参加費無料、会員以外は資料代として500円  
主催 向島学会・NPO日本都市計画家協会  
/都市計画キャラバン2004実行委員会  
共催 向島YEAR実行委員会  
協賛 東武博物館

- あいさつ 笹原克(NPO法人日本都市計画家協会副会長)  
山崎昇(墨田区長)
- 趣旨説明 真野洋介(東京工業大学助教授/向島YEAR実行委員会事務局次長)
- 話題提供
- 1 ハコからまちへ～まちづくりにおけるアートプロジェクトの役割と可能性  
菅我高明(現代美術研究所/向島YEAR実行委員事務局次長)
  - 2 アートが変えるまちづくり～向島のまちづくりを振り返って  
山本俊哉(マヌ都市建築研究所/都市計画キャラバン2004実行委員長)
  - 3 欧州のまちづくりとアートイベント  
菅野幸子(国際交流基金情報センター プログラム・コーディネーター)
  - 4 ミーティングキャラバンからカフェラインまで  
ムトウイサム(N-mark アーティスト)
  - 5 谷中界限と谷中芸工展  
菅原なな・川村航・池田祥・石井公二(谷中学校・谷中芸工展実行委員会)
  - 6 まちづくりから見たアートイベント  
村山友宏(NPO法人日本都市計画家協会理事)
- 意見交換 コーディネーター: 嘉藤笑子(キュレーター/向島学会理事)、真野洋介(前掲)

向島学会  
ニュース  
レター  
2004年  
8月31日号  
別稿

真野：それではただいまから「都市計画キャラバン2004向島」スタートアップ「まちづくりとアートイベントの連携」をはじめます。最初にNPO法人日本都市計画家協会副会長の笹原様よりご挨拶を頂きます。よろしくお願います。

笹原：今日は暑い中お集まり頂きありがとうございます。主催者を代表しましてご挨拶を申し上げます。今回は都

#### あいさつ

#### シンポジウム 議事録



市計画家協会と向島学会が一緒に実行委員会を設け、都市計画キャラバン2004向島を開催します。これから一月二七日に向けていろいろ活動をしていこうという、今日はスタートアップの日です。都市計画キャラバンというのは、都市計画家協会が設立して今年一年目ですが、毎年一回全国の都市に我々が入り込んで、まちづくりを少しでも手掛けたいという主旨でやって参りました。昨年は札幌でやりました。その前の年は九州の平戸まで行きました。今年はずいぶん東京でやるということになり、ぜひこの向島のみなさんと一緒にまちづくりをやりたいということになりました。今まで振り返ってみますと、東村山以来、東京では二回目ということになります。ましてや都心部でやるというのは、われわれにとっても挑戦の一つだと思えますので、これから一月に向けてぜひ、一緒にやっていただきたいと思います。

最近汐留の開発を見ていまして、実に熱いなと思っております。飲屋街の方からみると、屏風のように立っていて、この前テレビで商店主が、気温が三〇何度のときも四〇度近くある、あのビルが風を遮っているということを言っていました。私が若い頃都市計画をいろいろ教わった先生が言っていて、その先生の言葉でよく覚えているのは、「はしたない」という言葉をよく使われていたということです。新しい都市開発や建築を見て「これははしたない」といわれていました。最近あまり「はしたない」という言葉は使いませんが、この前新橋から汐留を見た時、やはり街は「はしたなく」したらいけない、と思えました。はしたなさの反対は、「たまたま

「いい」という言葉かなと思います。たまたまいがいいというのは、よくきれいなまち、心地のいいまちと感ずることもかと思えます。この向島はたまたまいがいいというのがとても魅力だろと思うています。単に建物が新しくきれいだということではなく、建物を愛していたり、道々のいるいるなものをみんなでかわいがっていたり、行き交う人が挨拶をしたり。そういうことがたまたまいがいいということ。どうも我々はその辺のたまたまいの良さを失っています。そして一方で、はしたないということをあまり感じなくなっています。それはやはり都市をつくっていく上で大きな危機であると思っています。

そうすると、今回の「都市計画キャラバン2004向島」というのは、このたまたまいの良さにみんなが魅力を感じて、いままで向島をつくられてきた方々、活動を行ってきた方々のたまたまいの良さがきつとあるのだらう。このキャラバンの中でたまたまいのよさをもう一つ付け加えることがもしできれば、われわれのキャラバンとしての役割は十分かなと思っております。これから一月末までの間、たまたまいをひとつでも見付け、ひとつでも育てるということをやっていきたいと思えます。みなさんもぜひ一緒にやって頂きたいと思えます。よろしくお願いたします。

真野：ありがとうございます。続きまして、墨田区長山崎昇様よりご挨拶を頂きます。

山崎：みなさんこんにちは。墨田区長

の山崎でございます。今日は「都市計画キャラバン2004向島」ということで、私どもの向島にスポットを当て、これから一月末までいろいろと研究をしていただくということで、地元の人長として、心から歓迎するとともに、大変ありがたく思っております。また平素、NPO法人日本都市計画家協会さんを含め、まちづくり関係の皆様には、墨田区のまちづくりまた産業振興にもいろいろアドバイスを頂いており、この件につきましても厚く御礼を申し上げます。

今、政府の方でもまちおこし、村おこしということ、地域再生ということが盛んに言われております。今年総務省が公募したまちおこしに私どもは二つの提案をさせていただきました。一つは小泉総理大臣から認定証をいただいて参りましたけれど、この墨田区は、江戸・下町文化の発祥の地で、多くの観光資源がありますが、なかなかそれをうまく活用していかないということがあるため、この観光資源を結び付け、来街者の多く来るまちをつくりたいということで、江戸と現代をむすぶまち、空間をぜひこの墨田区でつくりたいという提案をさせて頂きました。おかげさまで認定を受けてまして、これから認定を受けた中で下町のまちづくりを進めていきたいと思っております。もう一つは、アートの息づく向島というテーマで、モデル事業として提案をさせて頂きました。しかしこれは残念ながら採択されませんでした。今回の都市計画キャラバン2004向島では、アートあるいはイベントと結びつく向島ということ、一つのテーマとして研究をしていただくことに

なっています。従いまして、一月に改めて皆様がたの研究、調査、結果をうけて、来年もう一度、アートの息づく向島ということで再提案をしていきたいと思っております。墨田区、下町、向島を一つのキーワードにこれからも明日にむかってまちづくりを進めていきたいと思えます。みなさんの御支援御協力をお願いしまして、開会にあたりまして私のご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

真野：どうもありがとうございます。それではただいまからパネルディスカッションにはいりたいと思えます。本日パネルディスカッションの進行をまとめます私東京工業大学の真野と申します。よろしくお願いたします。

嘉藤：嘉藤です。この後懇親会の会場になっているRice+という京島一丁目の方にありますアトスペースのダイレクターをしております。よろしくお願いたします。

### 趣旨説明

真野：今日のディスカッションの進め方ですが、初めに私の方から主旨説明をさせて頂きたいと思います。その後各パネリストからの事例報告として問題提起をそれぞれしていただいて、最後に一時間ほどみなさんでディスカッションする形です。めいめいと思えます。では早速私のほうから本日のテーマと主旨についてご説明させていただきます。お手元の色刷りの資料を御覧下さい。

真野：先ほど山崎区長から今後アートとまちづくりにチャレンジしていく

というお話がありました。都市やまちの持つ根本的な力を引き出すキーワードとしてアートとか教育プログラムといったものがあるが、そういう従来の都市計画の事業で拾えないような個人の感性とか多様な暮らしなどを、場所の魅力とともに引き出していくために、特にアートがこれまでどういう方法を持って取り組んできたのかを全国各地の事例を見ながら意見交換していきたいと思っております。

まず都市、まちを巡る現状認識というところで、これは私の見解です。現在都市再生ということ、全国様々な取り組みが行われているが、どちらかというと都市基盤の整備という方が比重が大きく、なかなか文化の多様性や教育というものへの公共投資は少ないと考えています。また、まちづくりという言葉について、三〇年くらい蓄積があつて様々な成果が出てきましたが、逆に突破できない部分があります。例えば住民とか住環境などこれまでまちづくりが進められてきましたが、逆に多様な活動を疎外するという問題も出てきています。そして問題点だけでなく、大震災以降、各地で動きが同時多発的に起きています。そのなかで新しいコミュニケーションも形成されているし、こういうまちの活かし方もあるんだ、ということが起きて来ています。

次にそれを支えるものは何かということ、感性と創造性、公共性の関係ということについて考えてみたいと思えます。今まで感性とか身体性ということがキーワードになった時期もありましたが、なかなかみんなが実感を持ってまちをつくるキーワードになるのは難しかったし、都市計画とアートへの参

加がキーワードになったこともありませんが、何のために参加するのかということも、今も試行錯誤している所だと思えます。特に最近、公共、パブリックに対する関心が高まっているように思えます。それは空間的なものだけでなく、アートや歴史も含めて、共有していることと多様性のバランスをどう取るか、どういう風に地域の中で解釈していくのかというのがあります。それを踏まえて、創造性を高めるための参加が必要だと言われるようになってい

ます。これを生み出すために向島では向島学会という組織をつくりました。これが何を生み出すかについて何点かあげます。まずいろいろな分野といるいるなグループとのマッチングをする。二つ目は基金の設立。三つ目はデータベースや映像コンテンツ等の道具や方法、支えていく人の仕組みの蓄積。四番目はそれらを支える非営利な力を集める。ということ向島学会が存在しています。

本日のテーマはアートとまちづくりの連携ということで、アートとまちづくりのつながりをいくつかの切り口で考えてみたいと思います。まず一つは共通のイメージと共通の歴史。まちに對する多様な目や記憶はそれぞれありますが、表に出てこない。しかしそれぞれは建物に對する思い出とか緑とか水に對する感覚を持つているし、特に最近そういうものを大事にする人も増えてきているように思えます。一つ目は、それぞれが考えていることを楽しんだり使いこなしたりするための道具ができてきているように思えます。例えばホームページもそうですが、京島マップ

などもそうです。三つ目は活動拠点の多様化と居住環境との関係ということで、単なるイベントとしてというよりも、そういうことを定期的に行える場所ができてきています。それは空き教室や長屋を使ったものもあるし、もう一つは作品を作ったりものを調べたりするために地域に入ってくるアーティストが住まいの環境ということについて、自分が滞在しているときの環境や、地域で生活する人の暮らしというものに興味を持つようになって来ています。四つ目はまちに関わる多様な活動や人を巻き込むための方法が多様化しているのも、アートにしてもまちづくりにしても同じようなことが言えます。最後に産業。市場的な意味での産業もあるしコミュニティビジネス等地域の新たな産業ということもあります。あとは世代間の交流。世代間の交流を巻き起こすという意味では、アートもまちづくりも共通のものがあるように思

います。そういう時に二つがどうつながっていかばいいか？ということ、交流をキーワードにいくつか見ていきたいと思います。まず一つ目は地域間の交流。向島の場合ドイツのオッテンゼンとの交流があるが大きな地域間の交流、大阪との交流、そういう視点がある。二つ目は世代間の交流で、何か催しをやる時にどんな世代が運営しているか、男女のバランスなど。とくに働いている人が休日もう少し関わりやすくするた

めなどの工夫が挙げられます。三つ目は地域内の交流ということで、まちの人と、訪ねてくる人との交流をやっているかなくてはいけません。特にこれからやるキャラバン等がまちの人に認知

されていなければ地域の中での交流は起きません。四つ目は主体間の交流ということで、このような催しを通じてどういうグループや個人が繋がっているかというのをよく見ていく必要があります。五番目はとくにアートの場合ですが作品、作家を通じた交流ということ。やはりアーティストそのものは人を巻き込む力とか作品を持って新しい交流を生み出す力を持っているので、それをよく見ていく必要があります。最後は広報による交流ということで、情報の流通が地域内で行われるかというのを見ていく必要があります。

今日のそれぞれの事例紹介の中でどういうところを見ていかばいいか挙げてみました。一つは公共と創造性がどういう風にふたたび結合していかばいいか？ということ。二つ目はローカル、地域性がまちづくりを通じてどのよう

に発見されているかということ。三つ目は個人、場所の感性から組織や都市全体の力にどうなっていくのか？というところ。四つ目は創造性を高めるための仕掛けや実験がどういう風に持続的に行われているのかということ。五番目は色々なつながりがどういう風に担保されているのかということ。最後は、固有の生業とか将来のビジョンとどう

いう風につながっていくのかということ。これから、各パネリスト、コメントターの方に事例を紹介していただきまして、今お話ししたようなことを少しでも議論し、共有点を発見していけたらと思います。

### 話題提供

嘉藤：では現代美術製作所ディレクター 曾我さんお願いします。

1 ハコからまちへ  
まちづくりにおけるアートプロジェクトの役割と可能性

曾我：現代美術製作所の曾我と申します。よろしくお願ひします。この東武博物館のすぐ近くで、以前工場だった自分の会社の建物を改造してアートスペースを運営しています。今日は「ハコからまちへ」というタイトルで、個人的な視点から向島のアートプロジェクトの流れを紹介したいと思います。今年向島は「向島 Year 2004」というタイトルで、歴史や文化遺産の再発見、地域文化の創造、地域産業の誘発という三つのテーマを掲げてプロジェクトを行っています。これは都市計画キャラバンと歩調を合わせ、五月から一月までロングランで開催するものです。例えば、東向島二丁目の資生堂作業所のブロック塀に、アーティストの水内貴英さんの協力の下、地域の小学生児童と壁画をつくるワークショップ「こどもが彩るまちづくりプロジェクト」が展開中です。また、写真家の中里和人さんは、プチ地場産業創出計画として、向島に成っている夏みかんを収穫してママレードジャムを搾るワークショップを春先に開催、九月以降には空き店舗でアンテナショップや展覧会を計画中です。またアートユニットのKOSUGE116は、向島でグリーンマップの製作を行っています。このように今年には様々な形でまちを

み込んだり、地域と関わるリレーショナルでコミュニケーションなプロジェクトの多いのが特徴です。

さて、少し自分の活動を振り返りましょう。町工場の三代目に生まれたばかりは、現代美術製作所を九七年に始めました。建物は従来の空間の雰囲気を残して改装しています。始めは半信半疑だった両親は、一番初めに展覧会を開いてもらった大岩オスカル幸男という日系ブラジル人二世のアーティストが製作所の床に大きなドローイングを描く現場に触れてから、アートの面白さに目覚め、積極的に応援してくれるようになりまし。今までいろいろ活動を行っています。自分の活動のひとつのモデルとなったのは「昭和40年会」のグループ展です。彼らはその表現を通じて「ダサイのに格好良い」という一つの生き方を示してくれました。このスタイルは、ある意味で下町の生活感覚と通じる部分があります。また展覧会の仕掛けも、とてもコミュニケーションタイプなもので大変刺激的でした。

ドイツ建築家のティトスとの出会いは、自分が「まち」に出ていくきっかけになりました。一九九八年夏に彼が関わった「向島国際デザインワークショップ」にワークショップ会場として参加したのがきっかけで、それ以降、向島のまちとの関わりを自分でも考えるようになりまし。それから一年半後の二〇〇〇年に彼は「向島ネットワーク」というイベントを開催しました。企画としてはかなり強引な面もありまし。向島の空き地や空き家を使った作品はとも画期的で興味深いものでした。その秋の地域を挙げたイベント「向島博覧会」では、もっと組織

的に空き地・空き家を使った実験などが行われまし。そして二〇〇一年、博覧会などを契機に地元に移り住んできたアーティストたちが、自発的に「アートロジック」という企画展を開催まし。これは路地を巡りながら、それぞれのアーティストのスタジオに展示されたアート作品を見るというもので、非常に反響を呼び、会期中大勢の観客が押し掛けまし。ただし、これはアーティストにとつて大変負担が大きな企画でもありまし。しかし、まちの魅力を広く一般に再発見させたという点では、とても意義深い企画でした。これきっかけで、翌年には地域のまちづくりのプラットフォームとして「向島学会」が創設されまし。

翌二〇〇二年秋のイベントでは、アーティストの負担を軽くするために、独立したイベントをゆるく連携させるという方法を取りまし。「博覧会」というような大がかりな冠は止め、参加者が地図だけを作ってみんなで情報を共有するというやり方です。

またAAF（アサヒアートフェスティバル）という、墨田区に本社を置くアサヒビールのメセナ活動も向島でのプロジェクトに大きな援護射撃となつています。向島のグループもこのフェスティバルに積極的に参加し、その成果のひとつとしてRice+のような新たなオルタナティブ・スペースもオープンまし。

二〇〇三年には「草の根都市再生シンポジウム」が向島で開かれまし。向島学会の最初の大仕事であるこのシンポジウムでは、ハード系のまちづくりではなく、ソフトに関する話題すなわち、まちにおけるアートプロジェクト

の重要性が大きな話題になりました。このシンポジウムの成果を受ける形で、向島の中で様々な機会に話し合いを重ね、二〇〇四年は向島百花園の創設二〇〇周年にもあたることから、これまでと異なるアプローチで「向島Year」の開催に至つたわけ。向島Yearでは、それぞれ独立したイベントを時空的に緩やかに連携させるとともに、一過性でなく、地域の住民を巻き込むプロセスを重視し、アートも地域の「産業」のひとつとしてしっかり存在感を發揮してゆくといいような、大別して三つの目的を掲げ活動しています。

最後になりますが、アートの系まちづくりにはいくつ「法則」があるのではということも思いつくままに列挙してみました。結局のところ、まちづくりにおいて、アートの持つユーモアや批評性を大いに楽しみかつ尊重することが大切だと思つています。それがアトかまちづくりかは、コンテクストが決めるものだと思います。しかしながら、向島では全てがうまく行つていてと考えたら大間違いです。ファンディングの問題、組織論、サポートスタッフの問題（つまり人手不足）、アーティストの活動拠点の必要性、そして安易な迎合を避けながらまちにおけるアート活動をどのように行つかという、個々の表現にとつての本質的な課題、また形としては残らないプロジェクトを記録することの重要性など、まだまだ未解決の様々な問題があります。

個人的には、日常の中に当たり前にアートがある生活を実現したいと思つています。向島がそうした社会のひとつの先進的なモデルとなるように、今後も自分なりに活動したいと思ひます。

嘉藤：ありがとうございます。続いて山本さんお願いします。

2 アートが変えるまちづくり  
向島のまちづくりを振り返って

山本：まちづくりの視点から向島のアートイベントを振り返りたいと思ひます。私が向島に通いはじめて来年で二〇年になります。この向島は木造密集市街地といわれ、二〇世紀の負の遺産と位置づけられたところ。ただ、前世紀には風光明媚な場所として有名でした。向島の街づくりは一九六〇年代後半に大きな転機がありました。防災に関する危機意識から白鬚東防災団地がつくられまし。

私に関わつたのは、そこに「逃げなくてむ」一寺言問のまちづくりで、一九八五年にスタートまし。ここも一つの転機だつたと思ひます。防災をテーマとしながらも、雨水利用のまちづくりも進めてまし。京島では、行政の主導で道路を拡幅しつづつ硬い建物を造つていくことを進めてまし。いずれも財政事情などにより一九九五年あたりから今までやってきたまちづくりが思うように進まなくなつてまし。また、空き家の問題が深刻な課題としてクローズアップされてまし。一方、川の手俱樂部という地元の旦那衆のまちづくり団体がドイツの団体との市民交流を進めてまし。

向島におけるアートとまちづくりの関係について、バブルの頃、住友ベークライトの工場跡地開発の工事着工までの四年間、デベロッパが社会貢献として演劇活動のために跡地の空間を貸まし。これは向島の現代アート活

動の先駆けとなったのですが、地域とのつながりは薄かったのです。これに對して向島博覧会は、活動の広がりを意識したものでした。「空き家や空き地をどう活用し、向島を元気づけるにはどうしたらいいか」をテーマとし、特にアートを意識して行ったものではありませんが、アートを地域の資源や課題を再発見し、共有し、可能性を追求する一つの契機になりました。社会的な要素も多分に含まれていました。地域の人たちにとってはどうもアートは分からないということもありましたが、まちづくりに向けた一つの導火線になりました。

アートもまちづくりもいろいろありますが、最近のアートは社会性があり、実験的な性格も持ち合わせています。アートはそもそも表現力や変革力を持つており、まちづくりと結びつくことによって、それをいかに発揮できるような力を持っています。まだまだ日本の場合には、経済活動への影響や雇用の創出に至っていないし、まちの改善への期待はあっても、なかなか形にはなっていない。しかしドイツのオッテンゼンでは、アートの力でほとんど街がかわっていくのを見てきました。五年前くらい前から民間の投資が誘発され、メディアセンターができる等、今では空き家もなくなっています。一方、アーティストが安いから住んだのにいまでは住めなくなっているというジェントリフィケーションの問題が起きています。向島の場合には、幹線道路沿いの高層マンション建設に形を変えており、内部の密集市街地改善には至っていません。

まちづくりに対してアートイベント

をどう位置づけるかが問われています。向島では、これまでのアートイベントを契機にいろいろなまちづくり組織が立ち上がってきました。アーティストにとつてアートの表現だが、それが地域で行われた時にまちづくりの普及とか誘発とかネットワーク形成にもつながります。

今後は、諸外国で取り組んでいるような具体的な問題解決にアートの踏み込んでいけるのが第一の課題です。アートを活用したまちづくりのプログラムをどうつくっていくか。つまり、こちらがどんなものを提案し、どんなことを誘発していくかを共有することが大事です。一番目の課題はアートイベントをどうマネジメントするか。町会等地域の団体との連携については実績があります。しかし、資金調達や組織マネジメント、人材育成の課題は、このキャラバンを通じて考えていかなければなりません。

三番目の課題は、建築まちづくりに関する専門的なサポート。向島の空き家問題で直面しているのは木密の問題であり、建築に関わる問題でもありません。こういう専門的なサポートを誰がやるのか、それを公的にどう担保するのか。四番目の課題は、こうした課題を向島だけでなく、地域を越えて共有し、課題解決に向かうネットワークの広げ方。この四点が「アートイベントとまちづくりの連携」の主要課題として考えられます。

嘉藤：ありがとうございます。続きまして国際交流基金の菅野さんよろしくお願います。

### 3 欧州のまちづくりとアートイベント

菅野：国際交流基金の菅野と申します。今日はお招き頂きありがとうございます。国際交流基金という組織にはいつたばかりの時に欧州地域・草の根交流プログラムを担当することになりました。最初に申請にいらっしゃった方が川の手倶楽部の山本さんと山田さん。その時に向島とオッテンゼンの交流の話聞いたらすごく面白かった。ただ内容的に面白いだけでなく、地域間の課題解決型、単なる交流でなくお互いに話しあっていくこと、調査をしていくことが計画の中にまとめられていました。今、国際交流基金がどのように日本を変えていくことに寄与できるか、どのように国際交流を進めて行くべきか考えた時に、お互いに対話、交流の成果をどう地域に還元できるかということが重要だと思っています。私も何度か案内を頂いて向島博覧会等に通っていますが、地域の人たちがどのように自分達の地域を変えていけばいいか？ということに熱心に話されているのを聞き、やはり地域はそこに住んでいる人、何らかの関連性を持つている人が努力されているのだ。他の人の力では、本質的には変えることができないということを感じました。

私は去年ヨーロッパの都市再生の事例を調査してきました。ヨーロッパにおいても街が疲弊していた時期がありました。それが今まちの再生が盛んに行われ、それを担って来た地道な活動がたくさんあることがわかりました。私がこれからお話しするのはフランスのナントについてです。これからご紹介

介することがこれまでみなさんがお話しされたことと共通要素があることがお分かりになって頂ければと思います。ナントでは文化による都市の再生が積極的に取り組まれています。その背景としては都市の危機があります。労働者のまちといわれていたグラスゴーでは、文化の育成を図ることで文化やアートを有名な場所として街のイメージを変えたという一つのひな形があります。それを見たヨーロッパの各都市は、グラスゴーの例に注目するようになりました。ナントはフランスの大西洋側に面している造船のまち。決して住みやすい町ではありませんでした。ナントもグラスゴー等にならない立ち上がってきました。現在では、市の財政の

一五パーセントを文化に割いています。このように文化政策が手厚くされています。また、産業遺産や歴史的な建物等をどのように保存し活用していくかということも言われています。さらに、やはり地域密着イベントということでは、三大陸映画祭、ラ・フォル・ジュルネというクラシック音楽のフェスティバル、アート書籍フェスティバルなどをやっていきます。市民の人が楽しめるように、というのが本来の趣旨でしたが、それ以上にフランス内外から多くの人が集まりました。もう一つの成果は「リユー・ユニック（唯一の場所）」という公設民営のアートセンターで、日本というNPOが運営しています。元ピスケット工場を改装したものを使って、アートやダンス等のイベントをやっていきます。カフェやレストランもある。またコミュニティセンターの機能として託児所もあります。そういった使い分けを非常に考えておりいろいろな年代の

人が集まります。今、都市計画においては、人間や都市が持つ創造性をどう活かしていくかということが盛んに言われています。横浜でも文化芸術創造都市ということではいろいろとアイデアが考えられています。

簡単にヨーロッパの話をしました。ナントは一つの小さな例。ヨーロッパ各地で脱工業化、モータリゼーションの影響による中心市街地の空洞化や高齢化の問題が日本よりも早くおこっていました。それをどのように立ち直ってきたかという過程をもうすこし詳しく見る必要があります。

その中でそこに暮らす人間が自分達で変えていこう、という意識が大きいのです。専門家や行政だけが関わるのではない。日本の草の根レベルでの動きは誇るべきです。ぜひいつか日本や海外で活動されている人のラウンドテーブルを実現したいです。

嘉藤：つづいて名古屋からいらつしやいましたN markのムトウさんよろしくお願ひします。

4 ミーティングキャラバンから  
カフェラインまで

ムトウ：N markのムトウといいます。N markの活動を始めたきっかけは、名古屋に比較的美術館、美術大学、ギャラリーも多いのに対して、アーティストにとってリアリティーのあるアートの状況（シーン）がないと思ひ、そういう環境づくりから始めています。そして、アート側からの視点で環境をどうかえていくか？ということからアートスペースの運営から始まり

現在はカフェラインという活動にたどり着いています。

まず簡単にN markの活動からご紹介させていただきます。N markは二人でやっています。アーティストが自由に発表でき、考えるたり実験的なことが出来る環境がなく、そういうものを作りたいと思つたことがきっかけで一九九八年に一年間の期限付きでアートスペースを立ち上げ展覧会やイベント等を企画しました。そのあとスペースを失いその後の活動を試行錯誤しました。アーティストが作品を発表するところは空いている場所を借りればできます。では本当に必要な物はなにか？ということを考えていました。

いままでに行つてきた活動の中で最も重要で、それまでの環境に無かつたものは、人がアートについて話したり考えたり、出会つたりする環境だと思ひました。それで特定の場所を持たないゲリラ的なオープンミーティングというものを東京、京都、北九州などの様々な地域で始めました。それによつて私達の周りを越えて様々な人が出会い、いろいろな情報が集まつてくるようになりなりました。その後、まちづくり等の地域団体ともからみがあり野外展等も企画して行く中で、もつと地域に根ざした二度目のアートスペースを運営しました。二度目のアートスペースも諸事情により失うことになりました。

そして、改めて今までの活動を振り返つてみると、地域で活動しているのを見てもらうことも情報もどうしても地域で終わつてしまふ。本当に知つてもらいたい人や知りたい情報が流通しているのだからか？他の地域で行われているような興味深い情報であつても

ちゃんと入つてこない。自分達の活動を本当に必要としている人たちに届けてもらいたかつたし、私達も各地で活動している人たちの情報を知りたかつたという思いから、全国でオープンミーティングをすることになりました。そして、ミーティングキャラバンという名を付けて北海道から沖縄までの全国二〇か所巡回をしました。各地で情報を集めては次の会場で公開したり、プレゼンテーションしてもらつたり、そこにたまたま居合わせた人たちが情報を聞いて集まつてきた人たちが情報交換出来る場を作り出すことが出来ました。（以下各地の説明）

ミーティングキャラバンを通じてすごくいろいろな情報が手もとにはいつてきて、それをどういかにしていけばいいか？。これまで全然知らなかつたアートスペースがあり、今までは地方でやられて地方で終わるといふことがありましたが、それをなんとか流通させたいと思ひました。さまざまな地域などで同じレベルで問題点や課題を抱えながらやつている人たちを含めて、必要なアートや情報を流通させることをやつてみたいのです。地方で生まれたアートを地方でつないでいくことができたら、もつとアートのシーンが大きくなるのではないかと考えました。それで全国のアートシーンをつなぐカフェラインというものを考えて、実験的に今年の六月から始めました。カフェラインでは、一つのシステムとしてアートスペースやアーティストの情報を集め、それらを引き合わせます。また、アーティストが日本を移動するのはすごくお金がかかる、そのためなかなかアートが流通しないという現状が

あり、お金を作ることは難しいがそれ以外の部分でなんとか巡回させやすい状況をつくりたいと考えています。地域を越えてアートが横断すること「地域の特殊性」が生まれ、様々なアートシーンが見られる。それはアーティストにとつても刺激であり、地域にとつても有効なツールとして利用できるのではないかと考えています。

嘉藤：ありがとうございます。続きまして谷中芸工展実行委員会の皆様お願ひします。

5 谷中界隈と谷中芸工展

石井：はじめまして。谷中芸工展実行委員会の石井です。今日は、谷中界隈や谷中芸工展の歴史をご紹介します。

まず初めに、谷中芸工展の舞台となつている谷中界隈の簡単な説明をします。谷中根津千駄木界隈は、東京大空襲のときの被害が比較的少なく、また大小八〇近いお寺が密集する寺まちであつたため、大規模な開発がこれまでされてこなかつた、古い木造建築や路地、井戸が多く残されている地域です。しかし反面、東京という都市が変貌していく時代の流れから取り残されてきたということも言えます。ただ、芸大のお膝元ということ等から芸術に縁が深く、現在も多くのアーティストが住んでいるし、ギャラリーも多く存在します。また寺まちということで、贈答用のせんべい等の老舗の手仕事も多く残されています。その谷中というまちを様々な切り口で研究していた大学生やまちの有志によつて谷中の生活文化を守り、育てることを目的に、平成元年、

谷中学校というまちづくりグループが設立されました。

谷中学校は研究・調査によって得た知識をとり込んでいくだけでなく、勉強会等を開催していくことで、知識をまちで暮らす人々にも伝え、共有していくということを目指して行っていました。取り残されたまちという負のイメージをまずは地元の人から払拭してもらおうという目的がありました。まちの人に向けた発信を行う新たな場として、古い倉を改装して作られたギャラリーのオープンにあわせて、平成五年に第一回谷中芸工展が開催されました。このときは地元のアーティストの作品、まちに住む普通の人々がつくったもの、伝統工芸作家の作品等が展示されました。期間中に訪れた人たちが自分の作品も持ち込む、という現象も起きました。一回目は限定された空間で開催され、物理的な制限がありました。それをふまえ、二回目からはギャラリーにとどまらず民家やお寺などまち中にとび出した展示を行いました。最大の作品はまちそのものであるということ。現在はまち中で二〇軒位の参加者がいます。他のイベントと谷中芸工展の違いは、谷中芸工展がアートイベントではないことです。普通のまち人が参加しているし、作品にとどまらず、せんべい屋などにも参加してもらっているの

で、アートという枠組みではとらえきれません。芸工展実行委員会としては、アーティストたちの表現と日常暮らししている人々の表現を区別せず、日頃からアートイベントという言葉を意識的に使わないようにしています。次に谷中が抱えている問題を述べたいと思います。最初は残された街で

たが、バブル崩壊の時期から下町ブームが起こり、谷中のまちに突然スポーツライトが当たりはじめました。ほととすると懐かしいという分かりやすいイメージが広く伝わり、休日には多くの人達が訪れ、観光地化してきています。このことに比較的好意的な人もいますが、路地に人が勝手に入ったり、写真を撮ったりすることが増え、複雑な感情を抱く人も出てきています。また、ここ何年かは住みたいまちへ変化し、マンションが立ち並び例も出てきています。新しい人と古い人との交流も不足しがちです。三つ問題をあげる

6 まちづくりから見たアートイベント

村山：都市計画家協会の村山と申します。各パネラーについていちいちコメントする能力も時間もないので総論的な感想だけにさせていただきます。向島というのは浅草から見て「向かいの島」ということですが、名前に引っかけず議論の前提にしたいことは、このまちは「どこに向かうのか」ということです。

「二〇世紀の負の遺産」として否定し去るのではなく、その高密集集住こそはコミュニティを育てる上での貴重な「明日への遺産」になりうるのではないかといいことです。すでにそのことに気が付き、それを活かす方法の一つとして皆さんは「アートを活用したまちづくり」に取り組んでおられるのだと思います。これは向島にパブリック・アートを沢山置こうということではなく、アートの目でまちを見直したり、「まちがアートしていること」(いつもまちに創造活動が息づいているような感性豊かなまちづくり)を目指していることだと思えます。ただ、こういうテーマは参加者が特定層に偏らないよう一般市民、行政、企業、専門家、アーティストたちが意見交流し、協働しあう常設フォーラムが必要で、皆さんはその一端を準備してこられたわけです。またこの時あまり議論を拡散させないで、「楽しい街暮らしとはどういうことか」「楽しい街暮らしとはどういうことか」という視点を収斂していきたいものです。

今日はパネラーから各地の具体的な

お話を聴きとても勉強になりました。向島は「路地が豊か」で人情の裏表に通じた「小粋な町」だと思えます。また京島などは、固い「コミュニティの底力」によって八〇年間も大きな火災がなかったそう、そういう意味では防災先進地区といえなくもない。路地は単なる都市の隙間のようなですが、「コミュニティの居間」として人々の絆を育てる大変魅力的な生活舞台だといえます。都市再開発は「近代化」と称してこれまでそういうものを潰してきました。しかし今、経済価値では測れない「ゆたかさ」があったことに少し気づき始めたわけです。まちづくりとは結局、自分達の価値観を見直すことであり、町自身でその「生き方を変える」ことではないでしょうか。

例えば、いま都市景観を美しくしようとしているけれど、いわゆる、すつきりとしているが「無機的」な近代都市の都市景観ばかりでなく、多少猥雑であつても人間の肌になじむ「居心地のいい限界的場所」も美しい都市景観の一つだと思ふのです。作家の野坂昭如氏は「向島には近代都市のデザインなど鼻にも掛けない迷路空間の美がある」といい、建築史家の藤森照信氏は「近代都市の限界を打破するにはもう一度江戸が必要だ」といいます。江戸時代は文化が豊かで環境的な価値もあつた。懐古趣味からではなく、そういう失われた「豊かな町暮らし」の価値をもつ一度取り戻す大きな動きが始まっているわけです。

向島が持っているそのような「明日への遺産」を活かすときが来ていると思えます。どう活かすか？という問いに対して、「アートと暮らし」という

キーワードは、自分の個性を生かし感性を人に伝える手段としてのアートを介して、まち空間や暮らしを楽しく、まちの交流を盛んにし、そこから新たなコミュニケーションビジネスを生み出すことも可能です。

人は誰でも街なかに何か面白いことはないかと思っています。そういった期待にアートは応える要素を持っている。それは若い人だけでなく、お年寄りも創造的な活動をされているわけで、そういうものが実際に歩いてみるといろいろ発見できる。お店の看板や建物のテクスチャ等もアートであり、こういう意味でのアートは「町暮らしの楽しさ」を演出する小道具として大変意味のあるものになるわけです。最後に一つだけ要望を申し上げれば、路地の遊びや街で暮らすことの楽しさを演出し子供たちに体験させて伝えていくことをしてほしい。そのとき「街をどう造るか」でなく「街をどう使うか」という発想から始めてほしいと思います。具体的な各論についてはまた時間があれば後で致します。

**意見交換**

真野：会場の中にもいろいろ活動がされている方がいますので、神田でのお話を遠藤さんから頂きたいと思います。遠藤：神田に、アーティストが住んでいるところがあります。オーナーの都合で一〇月いっぱいに出なければいけないということになりました。家賃が急に上がったのです。その空間は、住むだけでなく、まちの人が集まったり子供の教室をやったりして、七年間みんなで創りあげてきた場所。しかし経

済的な問題は必然的なこと。今コンバージョンとカリノペーションとかが叫ばれているが、それがうまくいっても続けていけないような状態になっていきます。お知恵がありましたらいたいただきたい。

ムトウ：僕はスペースを維持するところが活動の目的ではなかったのですが、でもいいと言うか、やっていけるような気持ちというか、その都度やりたいことを明確にすることが重要なんだと思います。お金がなければスペースは小さくてもいいのではないかと思えます。スペースを維持したいだけであればそれなりにお金がかかるし、とても贅沢なことだと思います。維持することだけが目的なのであればお金を作らなければいけないと思います。経済の原則には従わなければならぬので難しいです。僕にはそれを越えられる画期的なことは提案できないと思うので。アートスペースのいくつかはどこから助成金を貰っているかカフェを運営してスペースを維持するとかいろいろありますが、この場合そこまでそのペースが必要なのでしょう。やりたいことだとと思うのですが、やりたいことを明確にして、それを大切にしていけばいいのかなと思います。

真野：神楽坂の平松さんがいらつしやるので、ご自分の地域と照らし合わせて何かコメントをいただければと思います。平松：私のところは最近二六階建ての大型マンションができました。まちづくりの会そのものは一〇年くらい続いていますが、それをきっかけにもう一回路地を残そうということ、昨年から取り組みを進めています。都市計画

的な人も関わっています。私はそれをきっかけにタウン誌を出しました。もう一つは都市計画以外に、そういうことに対抗する地元を持つ文化を発信したいということで、秋には神楽坂の古典芸能祭りみたいなものを作ろうということになっています。

真野：東京のローカルラインというが、各地域が情報交換をこういういろいろな場で行っている状態。そういう意味で今日のスタートアップのシンポジウムはいい機会だったと思います。あまり情報交換はうまくいっていないかもしれませんが、この後の交流会もありますので、ぜひ御参加頂きたいと思えます。

最後に、向島学会会長の高木さんの方からご挨拶頂きたいと思います。

高木：今日は街づくりとアートイベントの連携ということで、都市計画家協会および向島学会が主催団体となっております。わざわざ足をお運び頂きありがとうございます。まちづくりとアート、どう結びつくのかと思っていました。私自身も社会科学の経済学なので経済はなんで入らないのだろうか？と思っただけですが、結局人間の回復というか、日常生活面への取り組みというところで二つは関係しているのだということが分かりました。それから経済学も関係していて、こういうものの土台を支えているんだらうと思います。今日は本当にありがとうございます。向島学会、および地元の人にとっても有意義な日だったと思います。

(以上)



参加者計 70名  
 一般 26名  
 向島学会 19名  
 都市計画家協会 13名  
 パネリスト等 13名

記録：早稲田大学佐藤研究室修士2年 小林愛佳